



登り藤

令和8年9月8日（火）発行
令和8年度 第6号
江戸川区立南葛西第二中学校

八十一年目の夏と長崎修学旅行

校長 江熊秀昭

私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命があります。目をそらさず、知ろうとすること。悲しい現実でも向き合うこと。

そこには、「生きたかった人々」、「生き続けた人々」の思いがあります。

私たちには、広島のコどもとして、行動する責任があります。

相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること。

平和への思いを、自分なりの方法で表現すること。

一人一人の小さな行動が、平和への後押しとなります。

令和8年（2026年）8月6日 広島 コども 平和への誓い（一部抜粋）

争いが起きない世界を創るため、自分の中の争いの心乗り越え、相手の考えを受け入れる気持ちを持つてほしい、とりわけ若い世代には、そのために身近なことから考えてほしいとあの惨禍を生き抜いた被爆者は訴えます。そこで、若い世代の皆さんに提案があります。価値観の異なる人々との国境を越えた交流を深めてください。そうすることで、嬉しさや楽しさ、夢や希望を共有することができます。既に世界の多くの若者が、広島を始め様々な場で被爆の実相を学び、交流を深めています。皆さんも平和のために日常生活の中でできることを実践し、自らの思いを発信することで、その行動の輪を広げてください。

令和8年（2026年）8月6日 広島市長（一部要約・抜粋）

13歳で被爆した故・吉田勝二さんは、黒焦げで炭化した人、目が飛び出ている人、内臓が飛び出した人、手足がない人たちが右往左往し、浦上川では焼けただれた多くの人が、油と血と汚れた水、その水を飲みながら次々に亡くなっていった。私は、全身血だらけ、皮膚は剥がれ体の下の方にだらりとぶら下がっていた。顔も皮膚は付いていたものの、どす黒く焼け焦げていた。地獄のような惨状をこう語っています。

「平和の原点は、人間（ひと）の痛みがわかる心を持つこと。」

これは吉田さんが被爆体験を語るとき、いつも伝えていた言葉です。

相手の立場や苦しみに心を寄せ、分かり合おうと努力することは、対立や衝突を避けるための大事な一歩となります。それが人と人、国と国、それぞれの場面で信頼を育み友好関係を築く礎になるのです。

令和8年（2026年）8月9日 長崎市長（一部要約・抜粋）

上記はこの夏の広島・長崎の平和祈念式典で読まれたものです。『国際社会に貢献できる人間の育成を目指して』が、学校教育目標である本校初の長崎への修学旅行は明日からです。

「原爆は悲惨だ。被爆者はかわいそう。核兵器は嫌だ」という感想だけでは勿体ない。「世界平和」は人類の最大の課題です。その大きな課題に向かって、自分たちができること。学校生活で心掛けることを是非、真剣に仲間と話し合い、考えるための修学旅行であることを期待しています。

ヒントは上記のそれぞれにある次の文ではないでしょうか…

「相手の気持ちを想像し、意見の違いがあっても認め、受け止めること」

「自分の中の争いの心乗り越え、相手の考えを受け入れる気持ちを持つてほしい」

「相手の立場や苦しみに心を寄せ、分かり合おうと努力すること」

※本校ホームページも随時更新しています。ぜひ本校生徒の活躍の様子をご覧ください。➡

